說苑

道路改良會首腦部と道路問題の推移（一）

―副會長山田英太郎氏―

清水生

戰爭と經濟

獨逸の名將クラウゼイツツの名著戰爭論は彼はプロシアの皇太子に行つた進講の教材がその基礎をなすものであると言はれて居るが、其後彼は對ナポレオン戰爭の尊き體驗を基として、更に近代戰に研究を加へて戰爭論を體系づけ、實に十二年銳意氏は著作に沒頭したのであるがそのうちに於て。

戰爭の基本的要素とは、二者間の鬪爭卽ち決鬪である。戰爭とは畢竟するに決鬪の擴大されるものに他ならない、吾々は個々の決鬪が無數に集り、それが統一ある全體をなしたものが戰爭である、と考へる。

言を吐露してゐる。

と先づ戰爭の概念を說いて。

されば戰爭とは敵を屈服せしめて自分の意志を實現せんが爲に用ひられる暴力行爲である。而してこの暴力は敵の暴力に對抗するために諸種の技術上、科學上の發明を以て武裝する。故に戰爭に於ては交戰兩者は各敵の意志を屈服せしむため無限的努力を傾倒する。

と戰爭の無限界性を云つて居るが、高島大佐はその著皇戰に於て總力戰を說いて、武力、政治、經濟、思想等の有機的綜合力に依る戰であると云つて居るが更に。

勿論在來の戰爭とても、一つとして政治、經濟、思想等の參戰分野なくして行はれたものはなかつた。現にクラウゼイツは戰爭は他の手段を以てする政治の繼續なりと喝破し、ナポレオン又政治は吾等の運命なりと言つた。而して政略手段が戰略手段に先んじて戰爭の勝敗の歸趨を定めたる戰例も乏しくないのである。經濟に就いて見るも、七年戰爭の如きは國庫準備金の有無が戰爭の勝敗を左右しナポレオン亦戰爭は一に金、二にも金と金とて戰爭と經濟の關係を說いてゐる。

國防義會と山田氏

然しながら過去に於ける戰爭は政治、經濟、思想等の影響力は近代戰におけるが如く直接に深く國民の實生活に反映はせなかつたのであつた。唯だ單に政府の戰爭、或は國家官吏の仕事のやうに考へられ、又然らざるもこれ等の力を戰爭目的遂行の一途に統合發揮する着意に缺くるものがあつたのである。併乍ら近世に至ては戰時に於て國家總力を最も迅速且つ綜合的に發揚せんがために平時から國家態勢を戰備常備化の狀態に置くことが必要になつて來たのみならず、武力以外の戰力たる卽ち政治、經濟、思想等は平時に於て我に有利なるが如き基礎工作をなすことが肝要であることは今更に論ずるまでもない……。山田英太郎といふ人物は既に國家國防といふ重大問題を洞察してこれを深く憂ふるのあまり、既に去る大正元年十月に氏は自から提唱して、

凡ソ國防ハ一國國命ノ繫ル所ナリ、軍備ノ事一日モ國民ノ腦裏ヲ去ルベカラズ、況ンヤ單ニ經費ノ一事ヲ以テスルモ宇内列强皆共ニ國家歳出ノ主要部ヲ占ムルヲ例トシ、揀擇ノ當否、施設ノ得失、直ニ國家ノ生存力及ビ發展力ニ影響シ、延テ盛衰興亡ノ勢ヲ成ス、彼ノ列强ノ國官民ノ間、各種調査研究ノ機關アリ、思ヲ國防ニ潛メ、意ヲ軍備ニ致シ、精査深究倦ムヲ知ラザルモノ洵ニ以ヘアリト云フベシ。

と、國防の國家生存權に及ぼす重大性を説いて次いで。

顧ミテ看レバ、我國民ノ國防軍備ニ於ケル、留心敢テ切ナラズトセズト雖モ、惜ムラクハ意ヲ用キテ未ダ周到ナラズ、國防方針ノ事、國力調節ノ事ト、動員用兵ノ事、作戰計畫ノ事トヲ問ハズ、苟モ軍事ニ關スルモノハ、大小一併、擧ゲテ專門軍人ノ一手ニ放委シ、復タ多ク省ミザルノ風ナシトセズ、因習ノ然ラシムル所ト謂フト誰モ、抑亦一般軍事思想ノ未ダ發達セザルニ職由スルナシトセンヤ、開國進取ノ洪謨ヲ奉體シテ、益々國家ノ隆昌ヲ希圖スル國民ヲ以テシテ、將タ世界ノ均勢ニ伍シ、東洋ノ平和ニ任ジ、地位ヤ、責任ヤ、愈々高且大ヲ加フル帝國ノ國民タルヲ以テシテ、其ノ今日ニ至ルマデ國防軍備ノ上ニ於テ未ダ一個調査研究ノ機關ダモ之ヲ有セズト云フ、豈ニ寔ニ憾ムベキノ事態ニアラズヤ。

と國防調査研究機關の設置の緊要事たることを力説して。

國家防衛の研究機關設立提唱

或ハ曰ク、國防ハ軍國ノ樞機ナリ、妄ニ門外漢ノ容喙ヲ許ス可カラズト、然レドモ凡ソ軍事上性質ヲ帶ブルモノハ、動員命令、作戰計畫等ノ數項ニ過ギズシテ、寧ロ其ノ根本義トモ言フベキ國家防衛ノ大方針、軍備ト國家經濟トノ關係、軍備ト外交トノ關係、軍備ト國力發展トノ關係、軍備ト移民拓地トノ關係、軍備ト通商貿易トノ關係、軍備ト殖産興業トノ關係、軍備ト國民教育トノ關係ニ至ツテハ廣ク一般有識者ノ調査研究ニ俟タザルベカラザルモノ多キニアラズヤ、之ヲ奈何ゾ軍國ノ樞機、國民ヲシテ關知セシム可カラズトセンヤ。

と、軍備國防と國民の關係を說いて。

要之、軍備ヲ計畫シ、用兵作戰ノ事ニ任ズルハ、素ヨリ專門軍人ノ職責ニシテ、敢テ一般國民ノ關與ヲ容サズト雖モ、廣ク國家防衞ニ關スル方針施設以下、各般ノ要事ニ涉リテ調査シ、研究シ以テ其ノ根本基礎ノ立定ニ啓沃スルハ正ニ吾人國民ノ任務タルベキヲ信ズ、而シテ一般軍事思想ノ發達ニ稗益スルノ道、亦之ヲ措テ他ナキヲ思フ。

これが山田氏が今から約三十二年程以前に既に所謂國家總力戰態形の必要を達觀し亦痛感して社團法人大日本國防義會設立を企圖して、自から莫大の私財を投じ亦自から執筆して一般に呼かけた設立の趣意である。

而して氏は昨年五月二十三日の第三十七回海軍記念日に當つて大日本國防義會會長として講演會に臨んで一應の挨拶を兼ねて、氏は平素抱懷せるところの意見を吐露して居るが夫れによると。

海洋を制するものは世界を制する。……日本には自ら神州無敵の海軍があり、これが傳統床しき聖戰を續行して、世界を震撼して居る。この大東亞戰爭下に於て今日こそは實に初めの海軍記念日である。赫々たる我が威武の宣揚、功勳の雄大壯烈なることは何とも頌德稱述の言葉にない。

とて、氏はハワイの海戰、マレー沖の海戰、スラバヤ沖、バタヴィア沖の海戰、印度洋の海戰、珊瑚海の海戰等いち〳〵順を追ふて述べて、我が無敵の海軍は十二月八日宣戰の大詔が渙發せられた即日、米國太平洋艦隊の主力を擊滅して以來幾多の海戰に大戰果を收め、今も更に雄渾豪邁なる作戰を實行して居るのは感謝感激の外はないと縷々述べて。

眞に世界海戰の史上古今無比、絕倫の大業である。これはどうも人間業ではなさうに考へられてならない。天佑神助といふ言葉があるが、全く天照らす神明に通じての御聖業より外に考へ方はない。……我が海軍が三十七年以來正當なる發展を阻止せんとしたる逆效果の現れで二

十年間月月火水木金金といふ日曜土曜の休養もなしで血のにじむやうな、否な幾多犧牲に滿ちたる非常猛訓練を致し、それのみならず、我が武器彈藥、に於ても非常に優秀な一切の改新が行はれ、夫々部局の努力によつて大いなる效を奏する譯である。

と我が海軍の平素から無類の猛訓練と優秀武器等について述べて更に。

Z旗の持つ意義

併乍ら遠因は日露役の海戰、就中日本海海戰に東郷元帥によつて表現されたZ旗一旒、あのZの旗であつた。あの中に含んで居る意味は盡きざる程の意味が籠つて居る。あの旗は又今度もハワイ攻擊に我が旗艦の檣頭高く翩翻と揭げられて居ると承知するが、この中に含んで居る傳統こそは大伴家持の歌に現れて居る時代よりも尙その以前の日本の肇國からやつて來て居る意味を含んで居る「みづく屍」といふが、今日は「空ゆけば雲に散る」とかいふ新しい文句が附加へられた歌が出來たやうであるが、兎も角日本の默々と鳴りを潛めて靜然蕭然魂の用意を十分にする國體的傳統精神がずつと肇國の始まり、吾々の祖先が南洋東海西海の狂瀾怒濤の間に浮き沈みして居た頃から、一つの傳統があるのである。それが三十七年前の日本海海戰に東郷元帥によつてZ旗の上に揭げられた、この傳統こそが今日あらしめた遠因と考へるのである、云々。

と云つてゐるのを見ても、山田氏の國防換言すれば軍備に對する抱負の一端を察知出來るやうな氣がするのである。而して前記したやうに、氏は三十二年程以前に國防と云ふことは一般國民に其の知識思想の普及並に涵養をせねばならぬとの憂國的精神から發露して、渾身の努力を拂つて創設したる大日本國防義會は岡田啓介、有馬良橘、荒木貞夫、阿部信行の各陸海の大將と、財界の一方の重鎭たる堀啓次郎、南條金雄の諸氏を顧問として、理事、監事、評議員には公爵近衞文麿氏を始め政治界、財界、貴衆兩院の有力者其他有ゆる職域の所謂一流どころの人物を網羅して居るが、

事業としては講演會討論會の開催調査部研究部に於て國防に關する調査研究をなし、又關係當局に建議する等並に會報又は圖書を刊行頒布するのを事業目的として居る却々意義のある社團法人である。

岩倉鐵道學校と昌平叢書

山田氏は更にまた國家に於ける交通輸送の部門は最も重要の機關である。從つて人類文化の進展と福祉とを目指して斯業の任務は將來益々重要性を帶びて來る。從つて斯業の第一線に起ちて輸送事業に挺身努力する人材が益々必要となつて來るのを達觀して、これには斯業專門の知識と德性の涵養とに勉めなければならぬとの見地の下に、氏はまた巨額の私財を投じて獨力以て社團法人岩倉鐵道學校を創立して自から校長として斯界に學識ある多數の良教職員を招聘して育英事業に力を致して居る。現に岩倉鐵道學校は今日までその卒業生を世に出すこと約二萬餘に及んで國內の鐵道は勿論遠く大陸の輸送事業に携はつて國家社會に貢獻して居るところ甚大である。殊に現在戰時下の我國伸展の大動脈たる鐵道輸送の實務は誠に重大責務を有する職域であつて、これが聊かたりとも遲緩を來さんか國家の由々敷き重大問題である。茲に堅忍不拔の信念を把持して、輸送事業の重大責務を双肩に擔つて日夜奮鬪する斯界に有材の人々を養成しつゝあることは眞に國家に盡す所以なりと思ふのである。更に山田氏は泰東商業學校をも創立して、他日商業界に雄飛する幾多の人材の育英に勉めつゝあるが、氏は又德川幕府が寛政年間に幕府の力を以て支那から蒐集した貴重なる資料となるべき版木、幕府の官版と云はれてゐたものが、當時本鄕湯島の聖堂の倉庫內に保管されて居たが、彼の明治維新の大改革に際して、聖堂の燒失と共に逸散したるを島田重禮といふ儒者が、これを憂れいて高利貸から借金して苦心慘憺の上各所の古道具屋等を漁つて漸く六十四種類二百七十餘の版木七八千枚の尨大なるものを買ひ集めて居つたが、後ち勝海舟先生に依つて調達して高利貸に返却してその版木は仙臺屋敷の倉庫二棟を貸りて保管してあつたのである。而してこれを近衞公や井上毅

子等は印刷して以て世の學者に裨益するところあらしめんとの意志を抱いてていろ〳〵の人々に話した模樣であつたが、却々思ふやうに實現出來ずにその儘になつて居たのを氏は近衞公等と謀つて又々私財を投じて愈々京都に人を派して版木印刷の專門職人を十數名東京に呼び寄せて印刷にとりかゝつて漸く一ケ年餘の歲月を費やして、實に見事なる印刷を成就して五十部程出來上つたので、これに昌平叢書と命名して、禮、樂、射、御、書、數、と區分して特製の立派なる六箱に納めて畏くも　明治天皇に獻上して乙夜の覽に供し奉つてゐる。

道路改良會の創立動機

また山田氏は、道路改良會創立以來或は經理主掌の常任理事として或は本會の副會長として鋭意本會の發展と我國の道路の改良に對して公的努力を致されて居る。抑も本會の創立の動機は去る大正七年の歲も最早や去らうとする十二月廿九日のことである。大日本國防義會の主催の下に折柄來遊中であつた米國の道路改良家サミユール・ヒルを東京商業會議所に招いて國防と道路とについて臨時大講演會を開催したのであつたが、其の夜の晩餐會席上に於てヒルが更に一場の演說をして、そのあとにヒルが携來の幻燈機を寄附して道路改良の希望の記念とする旨を附言したのであつたのに發端して澁澤子爵は直ちに水野錬太郎、床次竹次郎、石黑五十二、堀田貢、淺野總一郎並に山田氏等と別室に會して、玆に道路改良の促進に任ぜんとする新團體の創立を諮つて一同の贊同するところとなり、越へて大正八年一月に澁澤子爵は水野錬太郎氏と連署して當時兜町の子爵の事務所に道路改良會創立の準備會を招集して種々協議をなしたのであつたが、この創立準備會はついで四會程開催して着々と準備を整へ、以て同年三月一日に朝野の有力者約二百六十餘名を銀行倶樂部に招集して、發起人會を開いて、設立計畫の經過報告趣意書及び規約等の議決をなし又役員の選任を了つて、玆に道路改良會の成立を見たのである。而して道路改良會は全く故澁澤子爵の盡力に依つて成り立つたものであるが、子爵と床次竹二郎氏が顧問とな

り、水野錬太郎氏を會長に内田嘉吉氏を副會長に推して、氏は常任理事をして鋭意會の發展と使命達成に努力して居る。茲に序いでに道路改良會の設立は如何なる趣旨に基いで創立したかを見ると。

道路改良會の創立趣旨

國家の隆運を昌にして公衆の福祉を進むるの途は種々あるが交通機關を完備することが其の最も緊要なものであるとの見地に基いて居る。この事たるや、交通機關が能く整備して各地の聯絡疏通が克く出來得れば從つて農村の開發振興は勿論、都市の殷賑繁榮は自然の結果として齎たらさるゝのである。從つて物價の如きも能く平準を保つて平時に於ては國運の進展に資すると共に一旦有事の際は國防上に至大の利便を供與するのである。然るに普遍的の交通機關である道路の施設に至つては他の交通機關が何れも顯著なる發達して居るのに比して尚多大の遜色がある、東京、横濱、大阪、神戸等の大都市の現狀に於ても單に道路網の統一整備を缺いてゐるだけではなく、路幅の如きも狹隘で其の缺點は多々あるのである。大都市の道路すらかやうの狀態であるから地方道路の不備に至つては實に甚しきものがある。全國交通の幹線たる國道にして尚且渡船賃、錢取橋等によつて辛じてその聯絡が出來るもの六十餘所の多きを算する位である。路幅僅かに六七尺の隘路あるかと思へば勾配五分の一を超ゆる所謂急坂がありたりして、人馬諸車の往來に支障を來たすことは多大である。かくの如き有様では產業の開發等は望むことが出來ないのである。

元來我國の道路の不備は國土の地形が自ら道路の開發を困難ならしめたにも依るが、又一面に於ては封建諸侯が故らに交通の便を避けて割據の風を成した餘弊をうけたのにも基因するが、又鐵道の開通によつて一時道路の必要なことが閑却せられたのも確に其の一因である。元々鐵道と道路といふものは各々其機能を異にするものであつて、鐵道の普及には自ら其の限度があつて、兩者相依り相俟つて相互に交通機關の效用を完うすることが肝要である。殊に近時に於ては道路を利用する快速力運轉機關の發達普及せん

とする情勢に當つて交通上に於ける道路の價値は愈々顯著であるが故に、之が改善は一日も曠うすべき事柄ではないのであるとの見地に基いてゐる。全く吾人をして本會創立の必要を痛感せしめるのである。

山田氏とはどう云ふ人か

斯樣に山田といふ人は幾多公的事業に關係して國家のために盡して居るが、一體この人は如何なる經歷の持主であるかと思ふて筆者は某氏に聞いて見ると。

氏は愛知縣の出身で文久二年十一月廿七日に生れてゐるから現在では八十幾才かの高齡である。氏の家は代々德川の親藩尾張德川家に仕へたる高いところの武士の家である。明治十二年同縣の師範學校を卒業して、更に進んで同十八年には大隈侯の創立に係る現在の早稻田大學の前身である東京專門學校の政治經濟科を優秀の成績で卒業して尾崎咢堂、犬養木堂氏等と共に朝野新聞で侃々諤々の筆陣を張つてゐる。更に愛知縣々會議員、眞宗大谷大學の教頭等を勤めて、明治廿五年に東京電車成田鐵道近畿鐵道等の企業に參加して居るが、同三十一年に當時我國に於ける最大會社であると云はれた日本鐵道の幹事總支配人兼庶務部長となり次いで常務取締役となつたが同三十九年國有後は專務清算人となつて、同會社が國家に買收されたあとの複雜極まる精算事務を主掌して萬遺憾なきを期して居る。又日清生命の會長、成田鐵道の會長等もなしたことあり、更に前記したやうに自ら莫大の私財を拋つて、大日本國防義會、岩倉鐵道學校、泰東商業學校等を創立し、又澁澤子爵、水野錬太郎、床次竹二郎氏等と共に道路改良會の創立に與かつて力を致し、其他早大評議員等幾多の公的團體にも關與してゐる。氏の宗教は眞宗に屬し、趣味としては讀書を第一として、散歩、園藝、生花等あつて、和漢の學に通じ殊に漢學は造詣深く、又氏は名古屋の名城から取つて雅號を金東と號して書を克くする、家庭には明治三年生れの賢妻れう女があつて氏の外界に對する活躍に憂ひなからしめ、長男俊夫氏は明治二十七年の生れで嘗てふらく檢事の職にあ

つたが、現在では岩倉鐵道學校、泰東商業學校の各副校長理事をなしてゐる。とのことである。

山田氏は孔子主義を奉ず

仿聞聞くところに依ると山田氏は孔子を崇拜して克く人に孔子主義云々と語るそうであるが、後記する筆者との對面の際にも氏の口から孔子主義といふ言葉は二三度發せられたのであつた、全體孔子主義なる言葉は淺學である筆者の如きは所謂聖賢孔子の說かれたる深遠なる學理を斟量するさへ却々六ケ敷いのであるが、孔子はあの春秋戰國の時代弱肉强食はこれ常として、堯舜の道は全く廢れて實力の登龍門が開かれてゐると同時に下剋上の惡風が社會を席卷する卽ち一言にして云へば全く道德が地を拂ふに至つた時代に遭遇したのであるが、孔子の生れた地たるや周公の子伯禽の封地であつたから、戰國の亂世に當つても此地には周公の遺風が殘存して……道は魯にありと言はれた程であり亦その上に家系から見ても孔子の祖先には仁德の聖人があつた程であるから孔子はこの道德的な環境から養成された元來の資質が光を放つに至つたのであらうか……史記によると孔子は幼い時から供物臺や供物盆を祭壇に置いて禮拜して居たそうであるが、こんなことを僅かに六七歲の時からしたことから見ても孔子は如何に謹嚴なる人物であつたかが窮れるのである孔子は萬人萬物を師として所謂先王の道を研究して遂にこの道を體得したのである。孔子の言葉によると彼は十有五にして學に志したとあるが、この學には政治道德のことであつて、孔子は先修身の道を學び次いで治人の道を學んだのであつた、かくの如く十五歲の少年が既に治國平天下の大志を抱いたことは現在私々の眼から見れば驚くべき社會事實と言はなければならないと思ふのである。孔子の世に步んだ道は玆に書く必用もないが、彼は齊の景公に才識を認められて、大いに起用されようとしたが、景公の臣晏嬰の故障によつて登用されなかつたので、魯に歸つて司寇卽ち司法大臣のやうな職務に任せられて彼は事實上の總理として行政權を掌握してゐたのであつたが、孔子は玆に於て大いに經綸を振つて著く魯を富强に

したのである。隣國の齊はこの情勢を嫉視して離間策を講じて孔子を魯の國から追ひ出さうと試みたので孔子は在官僅に三月で職を辭して六回周遊の途についたのであつた。

六回聖賢を容れず

この時孔子は五十六歳であつたが、六回はこの賢者を容れるどころか、却つて迫害を加へたので、彼は六十八歳の時再び魯に歸つて魯の西山に狩して麒麟を得て聖人の出現を喜んで……春秋……を執筆し更に經書を整理し、易の序を書き教へを後世に亞れて周の敬王四十一年に七十三歳で歿してゐるが、讀者諸賢も熟知せらるゝ如く即ち孔子教は支那に於ては回教となり、歴代の天子は篤く孔子を祭り、特に唐の惠帝の如きは文宣王と謚してゐるのであるが、宋の眞宗はこれに至聖の二字を加へた程である。孔子の著作としては云ふまでもなく春秋があるが、遺著としては大學子思の著はした中庸、孔子の遺族と門人が編輯した論語がある。これに孟子を加へて所謂四書といふのである。而して孔子の教即ち儒教の原理は仁に源を發してゐるが、この仁の意義については、孔子は即座に人を愛すと明言してゐる。孔子はこの仁について……仁者は己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんとして人を達す、能く近く譬へを取る、仁の方と謂ふべきのみ……と言つてゐる能く近く譬を取るとは我が身にひき比べて他人の身を思ひやることである。即ち己の欲せざる所を人に施すなかれと云ふことである。而して孔子の教を祖述した孟子は仁を以て惻隱の端と定藏し、又韓文公は博愛これを仁といふと述べて居る、朱子に至つては仁は心の德愛の理と解いてゐる、畢竟孔子の主張する仁とは人情思ひやり、若くは同情溫情の意味と思はれるが、併し仁は人間本然の心であるが反射的に仁を行ふ場合がある。從つて人間が仁を直感した場合に果して仁を行ふべきか否かを反省する必要がある。夫れ故に人間は智を養ふ必要がある故に孔子は仁を學んで學を好まざればその蔽や愚と言ひまた、知これに及ぶも、これを守る能はざればこれを得ると雖も必ずこれを失ふと言つて、仁と智の密接關係を指摘してゐるのである。

孔子の教と山田氏

孔子はまた、克己復禮これを仁といふと定藏してゐる、而して己に克つには強き意志の力を必要とする、それ故に孔子はまた……仁者は必ず勇あり、勇者は必ずしも仁にあらず……と言つてゐる、故に孔子は仁こそ道德の根本原理であつて、政治の要諦もこゝから發露せねばならないとの見地に基いてゐるやうである。筆者は某友人と一日某喫茶店で筆者の淺學を以て孔子教について語り合つたことがあるが、その知友は、孔子は周公の時世を追慕して周初の文化と社會とを復興しようとの意志を抱いて居たから尙古主義者である。……保守主義と見做すことが出來ると云つたが、併乍ら孔子は古きを溫めて新しきを知ると言つて居り、又大學には湯の盤銘の……まことに日に新たなり、日に日に新たなり、また日に新たなりといふ句を擧げて君子は民俗の一新に盡力すべき事を主張して居る、點を觀察すると孔子を必ずしも尙古思想或は保守主義として一概に押付けて仕舞ふことは大なる誤りであると思ふのである。又嘗て

齊の景公が孔子に政道を訊めた時に直ちに孔子は……君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり……と答へて以て君臣父子の大義を明かにして居る孔子があの春秋を書いたのも亦大義名分を明徵せんが爲めであつたのに鑑みて結局孔子は大義名分を大いに尊んだやうである。而して山田氏は前記したやうに過去及び現在に於ても氏の孔子教を奉じて、孔子主義を遵奉して世の中の總ての事に當つて來たやうに思はれるのである。即ち氏が熟慮の上日鐵國有買收後の慰勞金を當時他の重役連中が知己を招待して盛なる園遊會等開催するにも拘らず氏は一部の人々から所謂吝嗇家なりと蔭口を叩たかれるのを靜觀して以て莫大の私財を投じて國家輸送の將來發展に資するために鐵道學校を創立して斯界の人材を養成に志したるが如き又儒學の頽廢を憂れいて昌平護書の獨力刊行の如き、其他各種公共的事業に盡力したるが如く孔子の所謂仁智勇を應用したのであらざる乎。

維新曙光時代に生る

氏は北條足利の執權から南北兩朝の交立、群雄割據の所謂戰國時代を經て漸く德川三百年桃源の夢を破つて世は尊攘と佐幕の兩派に別れて、明治維新の大業も完成に近づく少しく前に德川親藩の一つである尾張藩の武家の家に生れてゐる氏の生れたる文久年間は外人の襲擊事件は組織的計畫になつて長藩士の金澤襲擊計畫が同元年の八月に又浪人大擧して横濱外人町を襲擊するといふ宣傳はやはり十一月に又あの有名な御殿山の英國公使館燒打は十二月であつたから氏の生れる寸前のことであり又氏の生れた文久二年には幕英の關係は急速に惡化して艦隊を江戸灣に示威して改めて生麥事件の償金要求を含む幕府に對する最後通牒が發せられて、幕府は江戸中に戒嚴令を布くと共に横濱の日本商人及び外人等に雇はれた日本人を退去させた位であつた當時駐日公使であつたオール・コツクは召還されて日本を去るに際して王政維新の近きことを本國政府に報告して居るが兎も角山田氏の生れたる文久二年の末から翌三年に亙つては攘夷運動の絶頂であつた、このやうな時代に氏は呱々の聲を生れて以來八十幾年間所謂人生の行路は或る時は順風に帆を上げたるが如く或る時は波濤怒濤の浪を乘り切らなければならないことがあつたろうと筆者は想像するのである。彼の官僚の輩の如く大擧を出てゝ順調に、一歩々々と階段を登つて靑羅紗の机と回轉椅子に身をしたして上官には從順猫の如く下僚には虎の如き威限を示すのとは誠に雲泥の差である聞くところによると氏は若き時代犬養木堂尾崎愕堂大石正巳末廣鐵腸成島柳北氏等の諸先輩と時を同じうして孔子の所謂仁智勇を揮ふて時の藩閥政府官僚政府を相手にして侃々諤々の堅筆を致してこの當局者の心膽を寒からしめたことが屢々あり氏の關與する新聞は發刊停止に遇ふたこと屢々であつたとのことであるが以て山田氏の人となりを略ぼ察知出來得るやうな氣がするが、名を聞くは面を見るに若かず面を見るは名を聞くに若かず、ともいふから畢竟その名を聞いて其の人を見るといふことは深い感興が生ずるので筆者は某日山田氏を芝區白金臺町の自邸に訪ふて見たのであつた。（以下次號）